平和を明日へ

広島原爆73年 �中

無関心から踏み出す

第三世代の企画展

「広島市出身の自分だからこそ、できることをしたい」。東京在住のウェブデザイナー久保田涼子さん(35)は、原爆の被爆者や被爆体験伝承者らの写真やメッセージなどを展示する「第三世代が考えるヒロシマ『　』継ぐ展」を東日本や広島で企画し、被爆の実相や平和への願いを発信している。

継ぐ展は、被爆者ら「語り継ぐ側」と、伝承者など「受け継ぐ側」にインタビューした記録をパネルで展示し、被爆者の講話なども企画。タイトルには、感じたことを「　」に込めて未来に継いでほしいとの思いがある。2015年から東京や横浜、仙台で開催し、17年からは広島にも会場を設けている。

高校卒業まで広島で過ごし、平和教育を受けてきた久保田さん。原爆に恐怖や死といったイメージを抱いたが「学校で習う以上の関心は持ってこなかった」。大学進学で上京し、「原爆の日」の8月6日が「普通の日」として過ごされていたことに最初は驚いたが、やがて慣れていった。

転機は14年に訪れた。故井上ひさしさん原作で、原爆投下後の広島を描いた「父と暮せば」の朗読劇に出演する女優2人に、広島の方言を指導することになった。広島県外出身の女優が、被爆者の思いを伝えようと懸命になる姿を見て、気付いた。「自分は原爆を知っているつもりでも、何もしていない」。若い世代が平和を将来につなぐための場所をつくろうと決心した。

「第三世代が考えるヒロシマ『　』継ぐ展」を企画する久保田涼子さん＝3日午後、広島市

15年の東京での初開催には、1週間で500人以上が来場。被爆証言を初めて聞いた男の子は夜、眠れなくなった。翌日、母親と再び訪れ、戦争や平和について考え言った。「お母さん、生きててくれてありがとう」。命を大切に思う気持ちが伝わったと感じたという。

「自分も何かしたい」―。継ぐ展の活動に加わり、被爆者の思いを語り継ごうと決意した人もいる。16年からボランティアとして運営に携わる広島大教育学部4年の小川歩美さん(22)だ。

被爆の記憶の風化に危機感を感じていた中、活動で広島市の被爆体験伝承者に出会ったことが背中を押し、伝承者の養成事業に参加した。「今の平和があるのは、終戦後に平和の尊さを感じた人々の努力があったから。それを後世に伝えていくのは大切なこと」と話す。

久保田さんは戦争や平和といったテーマについてハードルが高いと思われがちだが、「継ぐ展を通じて一歩踏み出せる人が増えている」と手応えを語る。平和を継承するという使命に、戦争を知らない世代が向き合っている。（桑原大輔）

愛媛新聞 :朝刊 2018/08/27 面名:二社 ページ:004
(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。